

令和3年度東播磨地域未来フォーラム 議事概要

1. 日 時 令和3年11月20日(土) 13:30 ~ 14:30
2. 場 所 加古川総合庁舎5階会議室
3. 参加者 21名(一般14名 行政7名)

<趣旨説明>

○現在、兵庫県では新しい全県ビジョン及び地域ビジョンの策定に向けて検討しているところであり、本日は、兵庫県や東播磨地域の未来について、皆様から率直なご意見を頂き、実りある意見交換の場としたい。

皆様が考える、地域の未来やご自身の夢、課題などについてお話頂く。

<意見交換>

○新全県ビジョンでは、大きなビジョンの方向性、どういう風に県全体があるべきか、どういう未来が想定できるかを検討している。それを踏まえ、東播磨の新しいビジョンを検討している。東播磨の特徴の一つは、ため池、加古川という大きな河川、播磨灘に面する海、「水辺」というのが一つのキーワード。今までのビジョンでも「水辺」があり、それは継続されていく、これは後々の子孫に残していかなければいけない。もう一つは「ものづくり」。東播磨地域は、明石、加古川、高砂、播磨町等を足していくと、実は、姫路、神戸を上回るだけの工業生産力をもっている特徴がある。さらにその「ものづくり」も、今は、いわゆる昔の重厚長大型から環境型というものに深くコミットするようになってきている。これからの産業と、日本の産業と、地域づくり、ものづくりという、これらも残していかなければならない。何を継続していきたいのか、今後2040年、2050年に残していくのかというと、「水辺」と「ものづくり」がキーワードになってくる。従来のままではなく、今のデジタル化の流れや、特にものづくりとなると装置を維持するために人が動かないといけない。これからは、今のデジタル社会の中で、逆に人が動いていかなければ、そのデジタルを上手く使えないのではないかと、そういう時代になってくるだろう。新しいビジョンでは「軽やかに動き」というキーワードを入れている。それにより、健康も維持しながら、この地域はもう一つの特徴である住宅地も多く、地域住民が幸せに生活できるような地域づくりをしていきたい。そして今、国のほうで進めている地方創生にも合わせて、この地域で人づくりができるような、「水辺」、「ものづくり」という資産を活かしながら、人づくりができるまちをめざすということをビジョンで考えている。

○農業問題というのは、やはり思い浮かぶのが後継者問題というところがすごく大きい。例えば住宅にしていくこともいいが、やはり稲美という田園風景、この東播磨という大きな地区で見れば、田園風景というものはやはり大切。水辺を大切にということのため池も多い、それを潰してまで何かをするということではなく、農水というのは、昔から農業ができないところに、あえて農業を持ってきたことに好機があったのでそれを継続していかないといけない。未来の就農者を育てるということで、小学校を中心に食育活動をしている。やはり主食である米作りから、昔ながらの芋づくりを体験し、その土に触れるということ、食物、口に入るものは農業から生まれている、すべて一次産業から生まれているということを勉強して、将来の担い手になろう人が生まれてくれればいい。そういう活動をしながらか、夢見ながらか、毎日仕事をしている。自分が学んできたこと、知識として入ってきたことに関しては出していき、将来の東播磨に繋げていけたらと考えている。

○今後、やっていきたいと思っているのは、人と人をつなぐのは自分の得意な部分でもあるので、人と人をつないで自分らしさを出して、いきいきと輝く社会を共創する、共に創るという意味で、今後はそこを目的に活動したいと思っている。自然の中で活動できる野外保育や、せっかく大きな山があるのでその山と一緒に活用して何かを企画をしたり、森や山、畑や田んぼなどの農業に限らず自然を守って元気にする活動などをしたり、畑で自閉症の子どもさんや引きこもりの方が遊びに来られたりするので、知り合いのクリエイターさんがものづくり講座をしながら、お母さんはお母さんで私と一緒に料理をして、みんなで食事をするような会とか、今後、そういったことをやっていくことを増やしていければと思っている。漁業の方も先ほどおっしゃっていたのですが、山と海はつながっているので、漁業をしている友達から、「森の方、山の方をしっかりやってもらえれば海も豊かになるんだよ」ということを聞かせてもらい、自分だけの問題じゃないということをすごく感じた。自分の活動している地域だけでなく、もっと大きな広い目で見て、世界的に環境のことなどを考える中で自分に出来ることを考え、これから取り組んでいきたいと思っている。いろいろな方のお話を聞かせてもらって、私にできることをしっかりと追求していきながら、いい社会に、お役に立てるようにと思っている。

県参事) 農業などは、新しい人たち、若い人たちが、ワクワク感やどこに喜びがあるのかなど、面白さ感を広げることが大事なのではないか。

○農家さんと同じく漁業についても高齢社会となり後継者がいないので、どう若い人に振っていくか、漁師というものをどうアピールしていくかが難しかったが、海苔が安定してくれば、そこで冬の仕事として寒い時期だが海苔で収入を得て、夏は好きな仕事をする。ウチでいえば釣りが好きな仕事になっているが、自分も釣りが好きだし、釣りをしてもらってお客さんの嬉しそうな顔を見るのも嬉しい。そういうことを仕事にしてもいいし、自分は魚を獲るのが好きだということであれば、夏は魚を獲る仕事を好きなだけ自分のやり方を追求してすればいい。今、一つの安定した収入として海苔を保つために我々は動いているという形になっている。イカナゴの不漁についてもなんとかしないといけないが、海の中が変わってきていることと獲り方がよくなっているということもあり、すぐにどうこうというのが難しい。海苔に関しては、リンと窒素という栄養塩不足による生育不良などが目に見えているので、そこをなんとか皆様の協力をいただきながらやっていければと思う。

○イベントをすることが目的ではなくて、来ていただいた方に、加古川のまちが好きですか、加古川のまちがどうなってほしいですかなどアンケートをとり、こういうイベントをしてほしいや、加古川に住み続けたいというご意見をいただいている。それをもとに、加古川駅前などをどう活性化するか考えている。婚活のイベントでは、神戸、豊岡の方など市外の方が非常に多かった。加古川市を知ってもらおうという意味ではちょうどいい機会。そういうイベントをして町が活性化すればいいということでやっている。県外の人と話をすると、姫路、明石、神戸はわかるが、加古川ってどこだろう？となるので、加古川を知ってもらえるように活動していきたい。加古川商工会議所青年部というのは、加古川のまちが元気になるような活動をしている団体。こういう意見交換会の中でいろいろなことを学び、何かお役に立たればと思う。

○この地域もやはり高齢化。基本、兼業農家なので農業を主体的にしているというわけではないが、後継者がいない。地域のことについて、自治会などは、やはりなり手が無い。婦人会がなくなり、老人会がなくなり、それから民生委員もなり手が無い。自治会は、今のままでいいのかという問題もあるが、とにかくなり手が無い。そして、空き家の問題。どこも空き家が増えてどうするのか。これら大きな問題を地域の中でどうするのか。

東播磨のビジョン委員会については、やはりここも高齢化というか、どうしても活動する人が限られてしまう。だから若い人も来てくださいとなっても、学生が来るわけでもなく、働いている若い女性の方が積極的に参加することもなく、限られた人たちがやることになってきている。様々な地域起こしもしていただ

いているが、ビジョン委員会も20年経ってこれからどうするのか。いろいろな活動をしている人はいるし、個人的にはつながりがあるのだろうが、つなげる人を育てるようなビジョン委員会にした方がいいのではないか。学ぶということを中心に、人づくりというところをビジョンの達成のためにシフトしたほうがいいのか。そういう人たちが地域に戻った時、地域の活性化ができるのではないか。まだ3月の末までであるので、皆さんからいろいろな意見を聞き、いろいろな活動をしていきたい。

県参事) 新しい働き方について。9時から5時まで働いてサラリーマンをするという働き方以外に、夏はなににして、冬はなににして、といういろいろな働き方がある時代になるだろうと言われている。面白い働き方が、ライフスタイルになる。また、シビックプライドについても、地域を愛するという、自分の暮らす地域を知り好きになる。それが地域で何かをする基本になる。地元の人が、地元のことをよく知らないというのは、地域の魅力に気づいていないだけ。外からの目に気づかず、良さがわからなくなると言われている。但馬、丹波の人がよく言われるのが、何も無いということは間違いであり、たくさんある。それをどうみせられるかということ。農業、漁業もそうだが、我々が発信して見せて行かなければならない。伝えていかななくてはいけない。そうすることで、この先の地域の面白さが生まれてくる。東播磨では、新しいビジョンに「ワクワクする」、「軽やかに動き」というキーワードを入れているというのは、そういうことなのかと話を聞いて思った。

○発信について思うところがあった。これがいいよあれがいいよといろいろしていくが、今の情報の取り方はどうしても人間は見たいものしか見ないので、どんなにキラキラしていても興味がなかったら見ない。結局、いろいろ発信をしてきた中で一番強いものはなんだったのかという口コミだった。「ニュー☆ハリマ図書室」の本棚オーナーも、何で知ったかを調べると、ほぼ口コミ。口コミが一番強いというのが2年やってきての私の感想。そういう意味で、ここ「ゆめづくり塾」は、居場所づくりでもあるが、そこに集まって来た、潜在的に地域のために何かやりたいと思っている人たちに、こういうやり方があるよとか、あと公的機関につなげてあげるとか、あの人に相談したらいろいろ助成金などを教えてくれるとか、奥様方の井戸端会議の延長くらいの場所ができたらいいなと思いはじめた面もある。人と人とのつながりと、あと子育て世代、そして、おじいちゃんおばあちゃんと子どもとの相性もいいこともあり、そういうつながりを作れる場所ができればいいというのがきっかけだが、最近やってきて思うのは、人と人とで話をしている、「これよかった」という影響力の強さみたいな

のものを感ずる。リアルな人と人とのつながりを作る場が大事なのではないか。

○東播磨フィールドステーションは、ため池をどうにかしていくための研究所。具体的には、ため池を適正に管理していく、そのための仕組みづくりを行っている。先ほどため池というのがこの地域にとっての魅力のひとつであるという話があったが、いざ、ため池管理者の視点に立つと課題が大きい。その課題に寄り添って適正に管理できるように仕組みづくりを行っているというところ。そのためにも、一つ農業というものをちゃんと考えないといけない。これは基本ではある。また適正に管理していくためには、市民の方やいろいろな方々と連携を促していく必要がある。そういう連携を通して管理が楽になるようにしていく必要がある。具体的には、草刈り。草刈りの有償サービスというものを展開している。この草刈りの中には、農家の人だけではなく、10代から60代の10名ほどのグループを作り、ため池の草刈りを地元の方々と一緒にするという取組を行っている。2つ目の取組は、ため池を新しい形で活用していく、ビジネス的に活用していくという取組。農業が衰退していく中で、ため池を維持・保全していくためには、ため池があつてよかったと皆さんが思えないと残っていかない。そのためには、ビジネスというようなところで、活動していくことを考えて一つの方向性として必要ではないかと思う。これはまたハードルが高いということで、試行錯誤しながら、多様な活動を行っていくところになる。

フィールドステーションが開設して3年ぐらいになるが、来年度からまた新しい形で組織を改革してやっていきたい。具体的には、ため池の管理者、企業の方、農家の方、いろいろな主体が参画した研究所、「一般社団法人 ため池みらい研究所」を利用し、より柔軟に活動していく土台を作りたいと考えている。

○うちの大学には地域研究センターという機関があり、文部科学省の予算を2002年頃から受け、地域研究をずっと行っていた。明石市の最東端である大蔵谷地区に位置する稲爪(いなづめ)神社の秋祭りを研究する人類学のグループに入り、一緒に祭りを手伝う参与観察をすることになった。それとは別に、自分でもテーマを作らないといけないということになり、たまたまゼミの1期生が、加古川市西神吉町や高砂市阿弥陀町のため池にお邪魔をしてかいぼりの参与観察をするということを卒業研究で行ったため、西神吉町と縁ができた。大蔵谷地区と西神吉町って、川でいうと朝霧川と法華山谷川だが、東播磨のまさに最東端と最西端。3回生ゼミでは、地域のイベントの手伝いとか祭りの手伝いをしている。ゼミでは、合宿調査を行って西神吉町や東神吉町にお邪魔して、法華山谷川で水害が起きた話とか、里山を売却した費用で地区の公民館を立てて拠点にしているとか、高齢化が進んで大変といった都市近郊農村の厳しい状況を、

聞き取り調査によって学んでいく。一方明石市では、参画する人がなかなか増えない都心近くのまちづくり協議会の現実を見たりする。毎年だいたい15名から20名ぐらいのゼミだが、学生は、東播磨地域でのフィールドワークの結果として、現代の地域社会の一面を目の当たりにする。こうして、ゼミの学びの場にさせていただくという立ち位置で、東播磨地域に関わらせて頂いている。以上の経験をもとに、4回生からは自分の研究フィールドで卒業研究に励んでいる。ゼミ生の中でも、加古川、明石、高砂、播磨、稲美の出身者は、おそらく毎年2割くらいしかいない、卒論で地元を取り上げるかという神戸ファッションを取り上げたりして、なかなか残念なこともある。とはいえ、中には、サッカーチームのバンディオンセ加古川（現チェントクオーレハリマ）を研究テーマにした学生がいた。また、加古川市の将棋によるまちおこし、かつめし、あるいは明石市のまちづくり協議会による防災訓練を取り上げた学生もいた。一方で、それぞれの出身県のふるさと納税であるとか、商店街の地域おこしを研究テーマとするゼミ生もいて、東播磨地域で学んだことをそれぞれの出身地に持ち帰るというようなこともある。こうして、何とか東播磨地域と関わりながらゼミを運営している状況。自分自身では、今、朝霧川の流域で子供たちに向けて生き物観察会を開催している方に注目している。それと、明石市のまちづくり協議会にもお邪魔をしている。これは何とかしていかなくてはいけない。このままでは持ちこたえられない。全国でも同じような状況だと思うが、コミュニティがなんとか続いていくように考えていかねばならない。

○ここまでで一番大きな共通点というのが一つ、次の世代、例えば後継者だったり、学生だったり、若い方をどうやってつなげて育てていくのかということが重要なキーテーマだと思う。

○担い手がないというのは、やはり、団塊世代の方々。まちづくり関係のデータで、まちを担ってくれる世代の人たちは、仕事が終わって動ける年代、だから65歳から75歳くらいの方たちが、地域を支える人たち。75歳以上の方は、どちらかという支えてもらう方たち。そこの逆転現象が今から起きるらしい。過疎地域では2005年から始まっていると聞き、その話をしながら、どうすればいいのかという話で、いろいろな意見がでていたが、私がすごいと思ったのは、阪南市。阪南市の子どもさんたちが小学校で防災の授業をしている。昼間、もし地震、火事が起きたとき、働き手は外に出ていていない。そこで、実は小中学生・高校生が一番力になってくれる人材なのだというスタンスで防災のことを教えている。この間、会議の中で最終的に結論として、こうかなというのが見えてきたのが、子どもを核にしたまちづくりをしていかないといけないという

話になった。そういう意味でいうと、子どもたちを巻き込んで、農業、漁業の体験をされているのは、すごく素敵で意味のある活動だと思う。学校側で、学校と地域が関わるカリキュラムが入っていると、自分のまちを知る機会がどんどん増えると思う。そういうことが一つのヒントじゃないかと思う。

○まちづくりを学生と一緒にやる、いわゆる産官学の点で、どうすれば若い人たちにアイデアを実現できると思わせるかが大事。

○まちづくりに興味をもっている学生さんがいるというのがうれしくて、やりたい、力になりたい、夢を持っている子が大学生だけではなくて高校生でもたくさんいるので、点でつながっているところを、そういう子たちを集められる場になればと思う。ポテンシャルを高めて行くことが大事。商工会議所は力を出せる場、土俵を作ってあげることが仕事。加古川交流研究会を来年はもっと力を入れしっかりやっていく。若い子たちに、どうしたらいいか考えてと言うと一から一生懸命考えてくれるので、そういう前向きさが私たちも頑張ろうと思わせる。

○東播磨地域は漁業も儲かる地域ですから、若い人たちも漁業を仕事にしてそれなりに地域に残っておられて、祭りなども結構熱心にやっているのではないかと思います、若い人たちはいかがか。

○地元の祭りがあるのが、二見町の御厨（みくりや）神社というところで、皆で練り合わせをする祭りだが、過疎化していく中で担ぎ手がいなくなるのと、新しい人が来ても知らない祭りに参加しにくい。そこを参加しやすい、もっと人が寄ってきやすい祭りに変えることが地域に根づく人を育てるのではないか。一戸建てが多くなるとそこの人に来てくれる。開拓していく中でも一戸建てを誘致するのは、ひとつの策ではないかと思う。そして、先ほど学校の話があったのですが、明石市は少し前から地域の仕事に触れようということで、私も干しタコづくりを小学校3年生に教えに行ったり、小学校の方から来てくれたりする。そうすると、今まで学校の行き帰りに出会ってもしゃべらなかつた子から挨拶してくれる。そういうことからつながっていく。あと、摂津播磨の漁業者の青年部に所属しており、そこに学生が来て、地域の仕事や漁業者の仕事をみて卒論のテーマにしているが、学生と一緒に明石、姫路、坊勢、牡蠣屋さんへ行くが繋がるのは薄い。卒論のテーマにして終わってしまい、60人から70人くらい来てもらっているが、今でも連絡をとっているのは2人くらい。地域に住むということがすごく大事なことはないかと思う。

〈総括コメント〉

県参事) 今、地域で言うと、これまでの組織の自治会の仕組みのなかでは、若い人は参加していない。では、まちで元気に活動している若い人たちはいないのかといえばそうではない。既存の仕組みのないところで、いっぱい活動されている。そういう時代なのだ。いろいろな枠組みがあり、いろいろな形でできる。そういう人たちとどうやってつながるか、何かの機会でつながれるような仕組み。それは、きっと役所がなんとか会議とか作ってやるものではない。役所も皆さんと同じプレーヤーのひとりという立場に立って何かしないといけない時代。皆さんの活動を我々も応援していくしくみをどういうふうにしていくか、まちづくりをどうしていくか、居場所の話、口コミの話がありましたが、それに一役担わしていただくということなのかと思う。今書いているビジョンは、30年かかってやっとつくる社会なのか、5年10年先の社会じゃないのかと思われる方もいるだろう。純粹に30年先の話を書こうと思うと、科学技術の話ばかりになってしまう。みんながつながって助け合っている社会というのは、5年先でもできあがっていてほしいが、20年先30年先も大事な社会で、未完の社会像なのだろう。一緒に作っていきける、どういう風につながっていきけるか。実はITでオンラインだけでやっている、それはそれでいいが、あまり広がらない、それ止まりになる。イノベーションというのは、実は対面で一緒にするところに生まれるという方が多い。皆さんの活動はすごく大事な活動で、それをどうやって一緒に広げていくのかということ、我々の考えるビジョンは扱っている。科学技術だけの社会ですと、科学技術白書を書いているだけになる。ビジョンというのはそうではなく、みんなと一緒に作っていく、そういう社会ということで、新しいITとか技術を踏まえながら、暮らしやすい楽しい社会ができるか。そこにどうやったら今の若い人たちが、今の小学生、中学生も入ってきてくれるのか、そういうワクワクするおもしろい未来を打ちだしてそういう仕掛けを一緒に考えてやっていきたい。これからもお知恵を拝借したい。

〈閉会〉

局長) 皆様、本日は貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。顔と顔がつながりましたので、このご縁を大切にしていきたいと思えます。本日の議論を踏まえ、全県と東播磨地域の新しいビジョンにも意見を反映させていく予定です。今後とも、ご協力頂きますようお願いいたします。